

重要

2018 年度心理学演習 1AB/3AB

レポート提出方法

(①から③の手続きが完了した時点で、レポート提出とみなします。)

- ① あらかじめ定められた締め切りまでに、レポートを**心理事務室内で心理事務員または心理助手に直接手渡す**。さらに、Course N@vi の「心理学演習 1AB/3AB」内の**所定の場所**に Word ファイルで提出する。この 2 点が揃わない限り、提出とは認めない。

※心理学演習 1AB/3AB のレポートに関しては、心理学教室事務室以外での提出は一切認めません。学部の事務所や教員ロビーなどへ提出しても、受理されたことにはなりません。

※提出期限以前に提出する場合は、事務員が在室している 9:00-17:00 の時間帯のみ提出を受け付けます。

↓

- ② 事務員または助手が、「**レポート提出カード**」の該当する欄に「**提出時間**(上記①の時間)」を記入し、「**受領印**」を押す。さらに、レポート表紙にも「**受領印**」を押す(なお、上記 2 点が揃って初めて受領印を押す)。

↓

- ③ 「レポート提出カード(別紙参照)」の該当する欄に、「**提出者サイン**」を記入する。その際に、当該レポートの「提出時間」「受領印」があることを確認する。

↓

レポート提出完了

レポートの剽窃、盗用、コピー&ペーストに対する注意

論文、書籍、web サイト、他人のレポート等の文章を、そのままコピー&ペーストしたもの、あるいは一部の語句を変更しただけの文章を含むものを提出した場合、剽窃、盗用として不正行為とみなされます。このような行為が発覚した場合、当該学期に登録した全科目の成績無効、停学を含む厳しい処罰が下されます。また、他人へ自分のレポートを提供した場合も、同様に不正行為として扱われます。

Course N@vi 上の類似度判定機能などを使用することにより、論文、書籍、web サイト、他の学生が提出したレポート、過去に提出されたレポートからの流用は容易に発見されます。

はじめに

錯視とは、刺激の性質・強弱が、物理的な刺激量と著しく異なって知覚されることである。錯視は身体や精神の変化に関わらず生じるものである。そしてここでは、錯視の中でも主なものとして幾何学的錯視と呼ばれる錯視だ。これは、平面図形の大きさ、長さ、角度などが実際とは異なって知覚される現象である。幾何学的錯視として最も古いといわれているのが、1801年にアプリアによって発見されたアプリア錯視であり、**錯視錯視とも呼ばれる錯視的錯視である。錯視錯視の方が長く見えるというものである。このような幾何学的錯視に関しては多くの研究が知られている。**

幾何学的錯視として特に有名なのは 1889年にミュラー・リヤーによって発見されたミュラー・リヤー錯視ではないだろうか。この錯視は直線両端に矢印を付けたとき、矢印の内側側の図形内側側の直線は短く見られ、矢印の外側側の図形内側側の直線は長く見られるというものである。つまり、実際に図形される線の長さは同じであったとしても、矢印の向きが違えば知覚するということだ。ミュラー・リヤー錯視の仕組みについて最近の研究を挙げると、私たちは壁のコーナーを見たとき、奥の引っ込んだコーナーは引っ込んでいるコーナーよりも遠くにあると思う為、実際にはもっと長いであろうと考える。その認識がまっすぐに修正され、脳はこの二本の線は同じ長さに存在しないと認識するのである。

本論文の目的は、錯視ミュラー・リヤー錯視の様々な先行研究と同じ結果が見られるかどうかの検証であり、2つの仮説を検証する。1つ目の仮説は矢印の長さ・角度が錯視の大きさに影響する。2つ目の仮説は系列・標準刺激量が錯視の大きさに影響する、**正しいものである。**



流用元の文章と一致する箇所が示され、流用元の web サイトや、誰のレポートから写したのかということも示される。